

『星と月は天の穴』(1)

——吉行淳之介研究(1)

榎原英城

初出と初版

『星と月は天の穴』は『群像』昭和41年新年号に発表され、同年9月に講談社から刊行されている。その際に大幅な加筆がされ、講談社版の「あとがき」によれば、その分量は「四百字詰原稿用紙にして七十枚ほど」に及ぶ。「あとがき」では「書き直し」という表現が一貫して使われているし、この加筆改稿は全体のほぼ3分の1に近い分量を占め、作品の構想自体をかなり変えてしまうものと考えられ、通常に加筆訂正とは幾分性格を異にしている。この作品を分析するに先立ち、この加筆訂正の跡を辿って、初出誌と決定稿とを比較する試みは、作家吉行淳之介の改稿の過程、作品構想の方法を知る上で興味深いものと思われる。

加筆に伴って、章の数が『群像』初出(以下、初出と略記)二十七から講談社版(以下、初版と略記)三十二に増えている。まず、その章の間の照応関係と加筆の有無を表にしてみよう。

部分的な訂正を除き、10行以上の大幅な加筆部分のある章についてのみ、その行数と章全体との割合を記した。

初出	初版	加筆の状況
	一	全面加筆

初出	初版	加筆の状況
六	二	加筆 15行 (約 $\frac{1}{4}$)
一	三	
二	四	加筆 22行 (約 $\frac{1}{2}$)
三	五	
四	六	加筆 15行 (約 $\frac{1}{7}$)
五七	七	
八	八	
九	九	
十	十	加筆 43行 ($\frac{1}{2}$ 強)
十一	十一	
十二	十二	
十三	十三	加筆 115行 ($\frac{1}{2}$ 強)
十四	十四	加筆 70行 (約 $\frac{1}{2}$)
十五	十五	
十六	十六	加筆 15行 (約 $\frac{1}{7}$)
十七	十七	
十八	十八	
十九	十九 二十	加筆 37行 (約 $\frac{1}{8}$)
二十	二十一	
二十一	二十二	
	二十三	全面加筆
	二十四	全面加筆
	二十五	全面加筆
二十二	二十六	
二十三	二十七	

初出	初版	加筆の状況
二十四	二十八	
二十五	二十九	
二十六	三十 三十一	加筆 55行 (1/2 強)
二十七	三十二	

初出六から初版二への移動は重要であろう。作品の中での矢添の小説の比重が、それによって微妙に変化していると思われる。

以下は初出と初版の加筆・訂正部分の比較表である。初出の削除・訂正部分は全文を掲げたが、初版における加筆は前述のように70枚にも及ぶので、文章は掲げず、前後に訂正部分のない場合はただ単に〔加筆〕とし、訂正部分のある場合は冒頭と末尾の文章を記し、中間は省略し、〔……〕と表示した。

なお、初出には旧漢字が使用されているが、掲載誌の方針と考えられるので考慮にいれず、以下の表では初版にあわせ新漢字を使用した。促音(初出では「思つた」「行つた」等と表記)についても同じく初版になった。

初版での ページ・行	初出	初版
p.3 l.2 ~p.8 l.6		〔加筆〕
p.9 l.1~2	矢添克二が、その日部屋の机の上に置いてきた書きかけの小説にも、女子大学生が出てくる。その小説には、まだ題は付いていない。 男を主人公にしたその小説で	矢添克二のその小説では、主人公の男はAという記号で書き記されている。副主人公のB子は、女子大学生である。

初版での ページ・行	初出	初版
	は、その男はA、女子大学生はB子という記号で書き記されている。	
p.9 l.2	矢添克二と同じ	矢添と同じ
p.9 l.6	嵌るということだ。つまり、矢添克二を戸惑わせている瀬川紀子とは、服装や動作や表情が対蹠的な女ということになる。	〔「つまり」以下削除〕
p.9 l.11~12	矢添克二の原稿から引用してみる……。	いま矢添克二は原稿用紙の上に書き記しはじめた……。
p.10 l.5	取かわしている。	取りかわしている。
p.11 l.13 ~p.12 l.3	……引用はここで終るが、要するにAはB子にたいして精神的になっているわけだ。B子の肉体を十分に意識した上で、その少女風の差らいと清潔感を貴重におもい、B子を大切に取扱っている。その方向にAを押しすすめてゆくと、恋愛の状態に入ることになる。 そういうAの眼には、B子はいかにも女子大学生らしく映っている。Aは、B子と交際するようになる。	……それだけの部分を書くのに、およそ一時間がかかった。時計をみると、午後二時十五分である。 彼はペンを置いて、煙草に火をつけた。 B子にたいして、Aに精神的な姿勢を取らせている、B子の少女風の差らいと清潔感を貴重におもい、B子を大切に取扱っているAの姿勢を、そのまま保ち続けさせなくてはならない。
p.12 l.4 ~p.13 l.3		〔加筆〕

初版での ページ・行	初出	初版
p.14 1.4~8	これから店に入って、それらの食物を選んで買う……。そういう女のする筈の仕事ですが、彼には嬉しい。大きく息を吸い込み、肺を満してゆく空気を甘いと感じるほど、嬉しい。もう一度、食料品のもつきまざまな色彩にしみじみした眼を向けようとしたとき、肩を叩かれた。	これから店に入って、それらの食物を選んで買う……。そういう女の役目に属する仕事を、もう十年も続けてきた。億劫な気持が動く。そして、彼の考えが初めて未来へ向く……。女と一緒に暮すことを考えようか。しかし、そのことを億劫におもう気持のほうが強い。 そのとき、彼の肩を叩く手があった。
p.15 1.5~8	「いや、半年ほど前からだ。」 「つまり、離婚したわけか。」	「そうだ。」 「それじゃ、ずっと独身なのか。」 「いや、結婚したことはある。」 「つまり、離婚したわけだね。」
p.16 1.3~4	「もちろん、その通りだよ。しかし……」 と、矢添は友人の耳に口を寄せて、 「女房が死んだら、と考えることもあるだろう。」 「それは、また話が別だよ……。入口での立話もなんだから、中へ入ろうじゃないか。」 友人が先に扉を押した。	「もちろん、その通りだよ。」 と、矢添は友人の背を押して、店の中に入った。
p.17 1.10	気持はない。自分の状態に、満足している。	〔「自分の」以下削除〕
p.17 1.11	傷ける	傷つける

初版での ページ・行	初出	初版
p.20 l.2 ～p.21 l.10		〔加筆〕
p.21 l.11～13	友人と別れて、矢添は一たん部屋に戻った。欲情は依然として続いている。	アパートの裏口から、矢添は三階の部屋に戻った。 彼は簡単な食事をはじめ。パンとチーズと鮭である。白い皿の上に、ピンク色の薄い鮭の肉を並べたとき、食料品店で感じた欲情がまだ続いていることが分った。
p.21 l.14	蠢いていた。	蠢いていたのだ。
p.21 l.15 ～p.22 l.1	……厄介な仕事が続いている。矢添克二は、小説家である。集中できて手応えを感じている仕事だが、	集中できて手応えを感じている仕事をしているときには、
p.22 l.5	全くの道具である。衛生のための道具である。しかし、そういう消極面ばかりではない。彼は口笛を吹きはじめる。美味い料理店へ出かけるのに似た気分も動いている。	〔「衛生の」以下削除〕
p.22 l.12	「あなたの言うことはアテにならないからな、	「やはり、
p.24 l.3	残っている。彼はかなりの満足を覚えている。	〔「彼は」以下削除〕
p.24 l.10	僅かながら、	そこには

初版での ページ・行	初出	初版
p.24 l.14	片腕の指先を	指先を
p.27 l.8	おもっている。見破られたとい う気持はない。隠しているつも りは、彼自身にはない。	〔「見破られた」以下削除〕
p.29 l.5	一度飲みはじめると、	酒を飲みはじめると、
p.29 l.7 ~p.30 l.9		〔「苦笑したとき、」まで加筆〕
p.30 l.9	旧式信号機	旧式の信号機
p.30 l.10	見覚えのある酒場	馴染みの酒場
p.30 l.11~12	眼を逸らすと、すぐ左手に画廊 があった。	一瞬のためらいの後、誘われ まいとして彼は眼を逸らした。 その眼に、すぐ左手の画廊の入 口が映ってきた。
p.30 l.14	画家の名には、	画家の名には
p.31 l.2	おもわず彼も	彼も
p.32 l.15	その女は、	女は
p.33 l.4	「好き？」 鸚鵡がえしにそう言い、訝し い、いくぶん咎める眼に戻り、	訝しいいくぶん咎める眼に、 女は戻り、
p.35 l.1	女は傍に	女はその傍に

初版での ページ・行	初出	初版
p. 35 1.3	ある。眼を見たが、女は黙って立っている。	〔「眼を」以下削除〕
p. 35 1.6	十月の	五月の
p. 37 1.13	運転するの?」	運転なさるの。」
p. 38 1.13	心配なことでもある?」	心配なことでも?」
p. 40 1.7	化粧をした	化粧をしていた
p. 41 1.7	投げ捨てられたように、あちこちに転がっている。	幾列にも並んでいる。
p. 41 1.10~12	車の行手に畑地の拡がりが見えてきたとき、もう一度、掌を彼女の膝に押し当てて、左右に揺すぶりながら、 「ほら、暗いところへきた。」 六 〔二へ移動〕 七 「ほら、暗いところへきた。」 と言って、矢添克二が隣に坐っている女の膝に掌を押し当てて左右に揺すぶったとき、	「ほら、暗いところへきた。」 車の行手に畑地の拡がりが見えてきたとき、もう一度、掌を彼女の膝に押し当てた。そして、その掌を膝の間に割込ませ、腿をつつむようにして左右に揺すぶったとき、
p. 42 1.9	腿に	腿のあいだに
p. 43 1.5~6	布地のほうへ、濡れた範囲は拡がってゆき、	濡れた布地から、

初版での ページ・行	初出	初版
p. 43 1.8	と矢添克二は	と矢添は
p. 44 1.2	両足を大きく	両足が大きく
p. 44 1.6~8	矢添克二の考えがそこまで行き着いたとき、	いや、そういう考え方は、男だけのものかもしれない。 そのとき、
p. 44 1.10	彼が頭の中で組立ててきた成行きに、その言葉は都合よく当て嵌った。しかし、彼の考えたことが正しいという証拠は無い。 「どういう女なのか。」 依然として、	どういう女なのか。依然として、
p. 45 1.4	表情になっていた。 「済みません。」 やがて、そう言った。	表情になっている。
p. 47 1.9	「向うへ行っていて。」	「向うへ行っていて、
p. 48 1.10	安ものの糊で	洗濯の糊がききすぎて
p. 48 1.13	ピンク色の傘	ピンク色の笠
p. 49 1.2	傘の輪廓	笠の輪廓
p. 49 1.4	そのとき、	そのとき、(改行)
p. 53 1.7	矢添克二の足がブレーキを	ブレーキを

初版での ページ・行	初出	初版
p. 53 1.8	路面を軋る	路面に軋る
p. 53 1.12	移ってゆく	移っていく
p. 53 1.15	大塀	塀
p. 55 1.4	酒を飲んだ。そして、机の前に 戻るとはあきらめ、ベッドに 潜りこんだ。	〔「そして」以下削除〕
p. 55 1.4 ～p. 57 1.6		〔加筆〕
p. 57 1.7～8	その題名のない小説の中では、 女子大学生B子を、依然として Aは大切に取扱っている。	まだ題名のついていないその小 説の中では、依然としてAはB 子を大切に取扱っている。
p. 59 1.9 ～p. 60 1.6		〔加筆〕
p. 61 1.11～12	「満洲」とかいう言葉が、今で もあることが珍しかったから だ。	「満洲」とかいう昔毎日のよう に見たり、聞かされたりしてい た言葉は、今はもう廃語になっ たという錯覚があった。
p. 61 1.12～13	そのことには	そのことに
p. 62 1.5 ～p. 63 1.10	「きのう……」 「ああ、紀子さんですね。」 紀子の声のようだ、とおもっ ていた。しかし、今日電話がか かってくる、とは考えていなか った。	受話器の中の声が〔……〕甘 い声になって、言った。

初版での ページ・行	初出	初版
p.63 1.12 ~p.64 1.4	「会いましょう、ところで、いま何時。」	「会いましょう。」 と、彼は答える。〔……〕 「ところで、いま何時。」
p.64 1.6	「止まって	「停まって
p.64 1.7	「十二時二十五分よ。」	「十二時二十五分ですわ。」
p.65 1.8~12	しかし、紀子の軀に甘さも動いていないのだろうか。それを確かめる気持で、テーブルの上の紅茶を飲み干すと、彼は言った。	自分の周囲に女の気配が〔……〕引摺りこもうと考えて彼は言う。
p.68 1.3	流れ出している	流れ出ている
p.70 1.4	矢添克二は	矢添は
p.71 1.8	矢添克二は	矢添は
p.71 1.8	重ね合わせてゆく。	重ねてゆく。
p.72 1.2	掌を突出して、懸命に	掌を突出して
p.76 1.8~9		〔加筆〕
p.77 1.1	一方交通	一方通行
p.78 1.2	かなりの日数を費してきた。結末の効果を強くするために、長く書いているわけだが、	かなりの日数を費してきたが、

初版での ページ・行	初出	初版
p.78 l.8	矢添克二がいま書いている作品の場合、彼はB子について	いま書いている作品の場合、矢添克二はB子については
p.78 l.9	事柄についても	事柄については、もちろん
p.78 l.10~13	だが、それまでは、Aの恋愛状態を保たせなくてはならない。そのための	B子が隠しているものが顕れるときのAの反応については、まだ矢添は分っていない。作者の心が曖昧に揺れ動いているので、まだ顕わすことができない。Aの恋愛のかたちを長く長く書くことによって、分ろうとしている。そこで、Aのその状態を保たせるための
p.79 l.2	映っていた	うつっていた
p.79 l.6 ~p.83 l.14	ブザーが鳴って、訪問者が入口にいることを告げた。彼は机を離れた。	〔加筆〕 短かくブザーが鳴った。ためらいがちの音に聞いた。 窓を離れて、入口に向う。
p.85 l.12	部屋の隅に佇んだまま、身支度をしている彼の様子を眺め、視線を机の上に	部屋の隅にぎこちない姿勢で立った。視線を、机の上に
p.86 l.11 ~p.89 l.15	「でも価値を信じていないでしょう。」 「価値と一口に言うが、それが問題だな。どういう具合に問題なのかを書けば、恋愛小説になるだろう。」	〔訂正及び加筆〕

初版での ページ・行	初 出	初 版
p.91 1.2~8	<p>「紀子の言うことは正しい」と考えている。</p> <p>いま書きすすめている題名のついていない小説で、矢添克二は何を言おうとしているかといえば……。恋愛には、それぞれのエゴイズムの上に立つ幻影がきわめて大きな部分を占めていることを描こうとしている。人々は情熱を籠めてその幻影を育て上げようとし、その背後にあるエゴイズムにはしばしば気付かない。あるいは、気付かぬふりをする。その錯覚を、彼は喜劇風に描こうとしている。また、恋愛が性欲という球根の上に咲いた花であることに、気付きたくない人々の多いことも、錯覚がますます深くなる理由の一つである。</p> <p>ただ、そういう情熱に価値を認めるかどうかは、また別の問題に属する。</p> <p>別の問題に属する、という考えにたどりつくまでには、紆余曲折があった。恋愛の情熱について考えると、虚しい気持ちになる時期があった。虚しいだけでなく、剥き出しで生まましい感じを受けた。動物的な生まましいさならばむしろ許せるのだが、薄い紗のレースで飾り立</p>	<p>いまの紀子の言葉について考えている。……たしかに、いま自分は、作品の中の男Aとのあいだに適当な距離を保つことができている。そして、AとB子との関係のかたちを眺めてみることに、エネルギーを注いでいる。そういう作業をすることで、恋愛というものの構造を調べてみようとしている。</p> <p>したがって、紀子のその言葉自体は間違っていない。しかし、なぜそういう言葉を紀子が口に出したかといえば……。</p>

初版での ページ・行	初出	初版
	<p>てであるのが、不潔におもえた。そのくせ、一方では強烈な情熱の擒になることに憧れたりした。</p> <p>極端から極端へ揺れ動き、曖昧な状態になってしまう……。そういう時期のあと、ようやく彼は情熱を取戻した。しかし、その情熱というのは、特定の女を見付けてそそぎ込むものではなく、恋愛の構造を観察することに向けられた情熱である。その構造自体を、眺め、腑分けしてゆく情熱である。その情熱を大切にしたい、といまの矢添克二は考えている……。</p>	
p. 93 I. 1	彼はふたたび、鳥の肉を齧りはじめた。	その声のなまなましさが耳の底に貼付いたまま、後はふたたび鳥の肉を齧りはじめた。
p. 93 I. 2 ～p. 94 I. 3		〔加筆〕
p. 94 I. 4～5	紀子は、しばらく黙って彼の眼を眺めていた。その視線を唇に移し、動く唇を見詰めている。その唇から、白い骨の端が覗いたとき、	紀子は黙ったまま、彼の眼を見返していたが、やがてその視線を唇に移し、動く唇を見詰めている。矢添のその唇から、白い鶏の骨の端が覗いたとき、
p. 94 I. 13	認めたことになった。しかし、その話題はそこで途切れ、「入	〔「しかし」以下削除〕

初版での ページ・行	初出	初版
<p>p. 94 l. 14 ~p. 99 l. 10</p>	<p>齒」という言葉は二人の口のどちらからも出なかった。「これは、隠しているのかな。隠すことになるのかな」と、彼は紀子の若い白い歯を眺めながら、そうおもった。</p>	<p>〔加筆〕</p>
<p>p. 100 l. 8~10</p>	<p>紀子の感傷的な口調に反撥して、彼は切返すように皮肉に言った。</p>	<p>紀子のその声は、世間から祝福される男女関係に身を置けない自分を悔んでいるように、聞えた。 矢添は、皮肉に言う。</p>
<p>p. 101 l. 1~4</p>		<p>〔加筆〕</p>
<p>p. 101 l. 5~6</p>	<p>反撥する口調に、彼は自分が恋愛というものの情熱に、いろいろの形で引まわされていた時期の名残りを感じた。</p>	<p>恋愛というものの情熱に、いろいろの形で引きまわされていた時期の名残りを、彼はそのとき感じた。</p>
<p>p. 101 l. 7~9</p>	<p>恋愛の構造自体を、つめたい情熱で眺めてゆく作品の前触れとして、いまの作品を書きすすめてゆこう。</p>	<p>恋愛の構造自体をつめたい情熱で眺めてゆく作品の前触れとして、いまの作品を書きすすめてゆくことが、現在の自分にとって最もふさわしい作業かもしれない。</p>
<p>p. 102 l. 2 ~p. 103 l. 3</p>		<p>〔加筆〕</p>
<p>p. 103 l. 4</p>	<p>矢添克二は</p>	<p>彼は</p>

初版での ページ・行	初出	初版
p.103 1.6~7	<p>深夜に起きて机に向う。小説を書きすすめようとするのである。</p> <p>その作品の中のこれまでのB子の像が陽画であったとすれば、彼は一転してB子の陰画を描き出そうとする。ある瞬間、B子が隠している部分があるという疑いをAは持ち、その疑念を追いつめるにしたがって、B子の陽画が陰画に移行してゆくことになる……。</p> <p>その部分を、矢添克二の小説の中から、引用してみよう。</p>	<p>深夜に起きて、机に向った。そして、矢添克二は、原稿用紙に文字を書き並べてゆく……。</p>
p.103 1.8	その一週間後に、	一週間後に、
p.104 1.8		〔加筆〕
p.104 1.9	短篇集……」	短篇集。」
p.104 1.13	<p>「展望台に連れて行って。」</p> <p>その展望台というのは、ホテルの最上階にある円型の部屋で、部屋全体がゆっくり回転している。</p>	〔「その展望台」以下削除〕
p.105 1.5	待っていてくれ。」	待っててくれますか。」
p.108 1.1	身振で、	身振りで、
p.108 1.5	身振には、	身振りには、

初版での ページ・行	初出	初版
p.108 l.10	引おろした。	引きおろした。
p.109 l.9	いままで、	いままで、(改行)
p.110 l.5~6		作品の中のこれまでのB子の像が陽面であったとすれば、一転して彼はB子の陰面を描き出そうとしているわけだ。
p.112 l.7	旅館から部屋に戻り、矢添克二はいま机に向って仕事をしている。	旅館から部屋に戻った矢添克二は、いま机に向っている。
p.112 l.8 ~p.113 l.1		〔加筆〕
p.113 l.1~2	そして、その少女と作品の中のB子とを重ね合わせることにきめた。	作品の中のB子と旅館で会った少女とを、重ね合わせることもきめた。
p.113 l.4	まったく無かったが、	まったく無かった。しかし、
p.113 l.15	ものとおもえる。	ものような気がしてきた。
p.114 l.2	呟くように言い、	独り言のように言い、
p.114 l.10	その少女は……。と、矢添克二は数時間前の情景を、そのまま原稿用紙の上で再現させた……。	その少女は……。と矢添克二は数時間前の情景を、そのまま原稿用紙の上に書き並べてゆく。
p.114 l.12	ベッドに潜って眠り、翌朝目	その場面を書き終ると、彼は

初版での ページ・行	初出	初版
	覚めると、	ベッドに潜って眠った。翌朝目覚めると、
p. 117 l. 11	とB子は言い、	B子は言い、
p. 119 l. 2	矢添克二は、	矢添は、
p. 119 l. 3	彼が誘うとかならず	彼が誘うと、いつも
p. 120 l. 4	思い違いではないか、という	思い違いではないかという
p. 121 l. 14~15	裸の軀で鮭の切身の色になって いるその傷を隠した。	鮭の切身の色になっているその 傷を裸の軀で隠した。
p. 122 l. 8	成熟への気配が熱く滲んでい る。	成熟への気配がある。
p. 125 l. 5	どうなる。と彼は	どうなる、と彼は
p. 125 l. 10	矢添克二は	矢添は
p. 125 l. 12	ベルが、鳴った。	ベルが鳴った。
p. 127 l. 7	いうのだわ。』	いうんだわ。』
p. 127 l. 8 ~p. 128 l. 9	「ともかく、部屋にきてもら いたくない……」 彼は強い調子で言い、ホテル のロビイを指定した。情事のた めだけのものではない、普通の ホテルである。	〔訂正及び加筆〕

『星と月は天の穴』(1) (榎原)

初版での ページ・行	初出	初版
p.128 l.10 ~p.131 l.1		〔加筆〕
p.132 l.2	そのホテルの	ホテルの
p.132 l.9	行き互らないうちに、	行渡らないうちに、
p.133 l.11	行き着く先は、	行く先は、
p.135 l.6	「きみは、何だと	「何だと
p.135 l.11	男の腹に押し潰されながら、 紀子は彼の首を	仰向けになった紀子は、彼の 首を
p.138 l.2	矢添克二は	矢添は
p.138 l.6	「なにが。」 紀子のこと	〔「なにが。」削除〕
p.138 l.12	「子供でもないが。	「子供でもないが、
p.141 l.7	彼はB子とAのことを	B子とAのことを彼は
p.141 l.11	破片を一つ一つ	破片を、一つ一つ
p.145 l.9	彼が言った。	彼は言った。
p.146 l.2	あれは、	あれは
p.147 l.5	たしかに、以前は、	その頃は、
p.149 l.2 ~p.162 l.9		〔加筆〕

初版での ページ・行	初出	初版
p.163 1.2~7	「旅行は、どうだった？」 待ち合わせの喫茶店で、彼は 紀子に訊ねた。	「帰ってきたんだね」 待ち合わせの喫茶店で、紀子 の顔をみたとき、彼はそう言っ た。そして、紀子が旅行から帰 ってくるのを待っていた自分 に、気付いた。 紀子は、一瞬怪訝な眼を彼に 向けた。彼は、テーブルの上の コーヒーを一口飲み、紀子に訊 ねた。 「旅行は、どうだった？」
p.164 1.2	「またか。」	反射的に拒否の姿勢になりか かる自分を抑えて、彼は黙っ ている。
p.164 1.14	必要なの。」	必要なの？」
p.164 1.15		彼は一瞬ためらう。しかし、 やはり今までと同じ答をする。
p.165 1.3	口を開きかけ、言葉は出ず、	口を開きかけたが言葉は出ず、
p.167 1.7~8	「奴隷だ。奴隷になれ。」 「もうなっているわ、お妾に だってなるわ。	彼は黙ったままにいる。 「牝犬にだって、お妾にだっ てなるわ。
p.167 1.13	「迷惑だな。」 噛んで捨てるように言ったと き、彼は紀子の眼が	〔「言ったとき、」まで削除〕
p.167 1.14	思い返せば、	考えれば、

初版での ページ・行	初出	初版
p.168 1.4~8	「迷惑だね。」	今までと違う新しい眼で、自分と紀子とを眺めようとする気持が彼の中に起っている。しかし、このように矢継早やに質問されては、掌を前へ突出して制止する姿勢になってしまう。 「迷惑だね。」 と、彼は答える。
p.169 1.3	押し当たり、	押し付けられ、
p.169 1.6	上下の入歯が	入歯が
p.170 1.2~3	小説家としての習癖によるものだ。	習癖によるものである。
p.171 1.11	「隠すな！」 紀子の腕を	〔「隠すな！」削除〕
p.171 1.14	もう一度言い、彼は掌で紀子の頬を	掌で、紀子の頬を
p.172 1.1~2	彼はことさら平静な声音で訊ねる。	やはりこういう形になってしまった、とおもいながら、彼は言う。
p.172 1.4	「そうなの、自分で自分を	「自分で自分を
p.172 1.8~11	いま荒々しい力を加えたならば、紀子の神経はその強い力にだけ反応し、力を加えている相手にまで届いて行かないだろう。強い力を受けた皮膚は赤く	怒りが彼の心に湧き上った。なにに向けられた怒りか。紀子と青年とのつながりに嫉妬しているのか、と彼はおもい、ことさら平静な声音をつくって、

初版での ページ・行	初出	初版
	<p>燃え上り、紀子の意識はその赤く燃えるものだけに集中する。そうすれば、自分は唯の道具になってしまう。</p> <p>「虐めてやろう。」</p>	<p>「虐めてやろう。」 と、言った。</p>
p.176 1.3~4	<p>「いま、おれは刺戟を与えるだけの道具になっている」とおもいながらも、</p>	<p>「結局こういう形になってしまうのか」とおもいながら、</p>
p.177 1.4	<p>彼はすでに</p>	<p>すでに</p>
p.177 1.5	<p>考えている。</p>	<p>彼は考えている。</p>
p.177 1.9	<p>ないのだろうか。</p> <p>他人の頭の中のことは分らない。だが、眼に映ってこない部分を理解するのは、小説家の仕事の一部である。紀子の頭の中を知ることができないだろうか。その頭の中に、這入りこんで行くことができないだろうか。できたとすれば、そのときは紀子の道具ではなくなる……。</p> <p>だが、自分が紀子の道具であり、紀子が自分の道具であることを、望んでいたのではなかったか……、と矢添克二は考える。いや、紀子が道具であることを望んではいたが、自分が道具になることは望んでいない。そういうエゴイズムを、紀子は</p>	<p>〔「他人の」以下削除〕</p>

初版での ページ・行	初出	初版
	責めるのだ。 紀子の道具にはなりたくない。とすれば、どういう形で、その頭の中に這入りこんでゆけばよいだろうか。	
p.179 1.4	なってしまったのよ。」 愛の告白とも取れる言葉である。彼は後込みする。鬱陶しくなる。紀子の道具になったほうが、まだましかとおもう。	〔「愛の」以下削除〕
p.179 1.6	彼はその事実を押付けようとする口調になっている。 紀子は	〔「彼は……いる。」まで削除〕
p.180 1.1~2	紀子と別れないと、厄介なことになってゆきそうだ。 「今が別れどきということか。」	「そういう女を受容れることができるだろうか。」
p.182 1.7	剃り取られて	剃り取られて
p.186 1.8	「今はもう、	「もう、
p.187 1.3	可愛い	可愛い
p.187 1.6~10	その溜を、可愛らしいふくらみのままにして置きたくない気持が彼に働いた。	瀬川紀子とのあいだには、人間関係と呼べるものが出来上がっている……、それは避けることのできない事実だ、とこのとき彼は強く感じた。女性とのあいだに人間と人間との繋がりを持

初版での ページ・行	初出	初版
p.187 I.14	<p>声音ではない。彼は、その恐怖の裏付けをする言葉を、口に出すつもりで、</p>	<p>つのは、なんと久しぶりのことだろう、と彼はおもう。そして、紀子の頭の瘤に、親密感に近い、一種の肉感を抱いた。と同時に、その瘤を可愛らしいふくらみのままにして置きたくない気持も、彼の中で動いた。</p> <p>〔「彼は」以下削除〕</p>
p.188 I.1 ～p.192 I.8	<p>「連れて行って。一緒に診てもらいましょうよ。」</p> <p>その必要が全く無いわけではない。車が宙に浮き、尾燈の赤い光がぐるりと回り、それから意識の途切れた幾秒間かがあったのだ。結局、紀子と待合わせで、一緒に外科病院へ行く約束ができた。</p> <p>知らない病院のほうがいい、と彼は考えている。紀子と会い、タクシーに乗って、おおよその見当を付けておいた外科病院を探しながら、紀子を伴って搔爬のための病院を探している錯覚に、彼は一瞬捉えられた。しかし、紀子の横顔には、むしろ上機嫌にちかい色が浮んでいる。</p> <p>それにしても、前の夜に、車</p>	<p>その必要が全く無いわけではない。車が宙に浮き、尾燈の赤い光がぐるりと回り、それから意識の途切れた幾秒間かがあったのだ。</p> <p>「連れて行って。一緒に診てもらいましょうよ。」</p> <p>〔p.188 I.4～p.191 I.13まで加筆〕</p> <p>タクシーに乗って、おおよその見当を付けておいた外科病院を探しはじめる。目的の場所に、なかなか行き着けない。街を、動きまわっているうちに、紀子を伴って搔爬のための病院を探している錯覚に、彼は一瞬捉えられた。</p> <p>彼は紀子の横顔を窺う。紀子の顔には、むしろ上機嫌にちかい色が浮んでいる。車の中で、</p>

初版での ページ・行	初出	初版
	<p>の中で彼が「別れどきだ」と決心した瞬間に事故が起り、いまこうして肩を触れ合うようにして病院へ向っている。二人とも同じように頭のでっぺんに小さな瘤をつくって……。</p> <p>彼は皮肉な気持になっている。しかし、紀子との関係をどういう形にするか、ふたたび曖昧になっている。</p>	<p>肩を触れ合うようにして病院へ向っている。二人とも同じように頭のでっぺんに小さな瘤をつくっている。滑稽だがやさしい心持になってくる。紀子の上機嫌がすこしずつ彼の中に移ってきた。</p>
p.192 l.12~13	彼は自分の気持の曖昧さへの皮肉も含めて、そう言った。	機嫌のよさや皮肉な気持などの入り混った、はっきり形の整わないところから出て行った言葉である。その曖昧さに、紀子の返事が形を与えかける。
p.193 l.10	前の夜と同じく、やはり彼には紀子の心も曖昧なのである。	彼には紀子の心も、曖昧である。
p.193 l.13		つづいて、弁解の言葉が出てくる。
p.193 l.15 ~p.194 l.1	まだ丈夫な歯が普通なんだ。」	自分の歯が普通なんだ。」
p.196 l.2	「おや。」	「あ。」
p.196 l.10	その白は	その色は
p.197 l.14 ~p.198 l.1	彼は紀子との関係がはっきりと終ったことを感じた。いま、紀	いま、紀子の眼も、その写真を見比べている。これで、紀子と

初版での ページ・行	初出	初版
	<p>子の眼も、その写真を見比べている。病院の外へ出た瞬間、紀子は短い叫び声をあげながら、走り去って行くだらう。そして、紀子が離れて行くことは、彼の希望するところでもあった筈だ。</p>	<p>の関係が終ったのか、と彼はおもった。病院の外へ出た瞬間、紀子は短い叫び声をあげながら、走り去って行くだらう。</p>
p.198 1.3	矢添克二は	矢添は
p.199 1.1	許してくれるのだろうか？」	許してくれるさ」
p.199 1.5	<p>街路樹は、茶色くちぢまっている葉をわずかに残している。その枝を通り抜けてきた日の光が、</p>	<p>街路樹の重なり合った葉を通り抜けてきた日の光が、</p>
p.199 1.9~13	<p>「そういうきみを許してくれる若い男も、きっと見付かる筈だ。」</p> <p>そう言いながら、彼は考えている。紀子とのあいだに「また別のことがはじまる」とすれば、いま紀子の言ったような形しか残されていないことは確かだ。</p>	<p>公園を出て、紀子と一緒に動きはじめたとき、すでに別のことがはじまっていたのか、と彼はおもう。そして、その新しい時間の中での彼の姿勢は、いま紀子の言ったような形しか残されていないのか。</p> <p>「そういうきみを許してくれる若い男も、きっと見付かる筈だ。」</p> <p>と、彼は言う。自分の姿勢を定められてしまうことから脱れようとして、言ってみる。</p>
p.200 1.2	向い合って立っている。紀子と	向い合っている。紀子の姿を眺

初版での ページ・行	初出	初版
p.200 1.5~6	の間のつながりを冷静に観察し 検分してゆく眼が曇るほどの強 さで、 咽喉に貼り付きながら出てく るような声で、彼は曖昧に言 う。 「しかし……」	めている眼が曇るほどの強さ で、 「しかし……」 咽喉に貼り付きながら出てく るような声だが、すでに曖昧さ は無い。
p.200 1.7~10		〔加筆〕

『星と月は天の穴』には初版以後、次の6つの版がある。

〔A〕『吉行淳之介長編全集』、昭和43年11月、新潮社。

〔B〕『星と月は天の穴』、昭和45年9月、講談社。

〔C〕『星と月は天の穴』、昭和46年7月、講談社文庫。

〔D〕『吉行淳之介全集』第6巻、昭和46年8月、講談社。

〔E〕現代の文学 19『吉行淳之介集』、昭和47年2月、講談社。

〔F〕『星と月は天の穴』、昭和48年3月、広済堂出版。

このうち、Bは初版の改装版であって、本文の異同は全くない。のこるA、C、D、E、Fの本文と初版との異同を次に掲げる。

なお、A、C、D、E、F版では初版にはあった会話文末尾の句点（「……。」）が削除されており、C、F版では多くの振りがながついているが、いずれも異同とは考えず、表からは除外した。

初版での ページ・行	初版	その後の版
p.11 1.4	車が真直ぐに	車が真直に〔C、F版〕
p.22 1.10	「はい、	「はい。〔D、E版〕

初版での ページ・行	初 版	その後の版
p.92 1.15	響	響き〔A, D, E版〕
p.93 1.1 ～p.94 1.5	その声のなまなましき〔… …〕見詰めている。	彼はふたび鳥の肉を響りは じめた。〔C, D, E, F版〕
p.94 1.5	矢添のその唇から、	矢添の唇から、〔C, D, E, F 版〕
p.115 1.7～10	「……………」 「淫売。」 Aの昂奮がたかまって、そう いう言葉が出た。	〔C, D, E, F版 削除〕 (ただしF版では、この間1 行明き)
p.133 1.8～9	考えてみるまでもない。きわめ て日常的なものだから、厭な目 に遇わなくても済む……」	考えてみるまでもないものなの だから……」〔C, D, E, F版〕
p.158 1.6	閉め切った部屋の生あたたか い空気を、彼は顔の皮膚に感じ る。	閉め切った部屋空気は、生あ たたかかった。〔C, D, E, F 版〕
p.160 1.8～9	彼は考えているのである。	彼は考える。〔C, D, E, F版〕
p.167 1.2～3	「仕方がないじゃないか。」 「いくらだって仕方があるわ。」	〔C, D, E, F版 削除〕
p.170 1.13	曖昧な笑い顔が向い合ったと き、紀子が言った。	〔C, D, E, F版 削除〕
p.181 1.13 ～p.182 1.2	「大丈夫のようだよ。」 「どことも毀れていないか。」 「毀れていないわ。」	〔C, D, E, F版 削除〕
p.186 1.9～10	自分では気が付かなかったけれ ど。ほくもそうだ、	あのときには気が付かなかった けれど、ほくもそうだ。〔C, D,

初版での ページ・行	初 版	その後の版
p.192 l.7	心持になってくる。	E, F 版) 心持になっている。〔C, F 版〕
p.193 l.13 ～p.194 l.1	つづいて、弁解の言葉が〔… …〕普通なんだ。」	〔C, D, E, F 版 削除〕

旧作の訂正を吉行淳之介はしばしば行っているが、多くは削除の方向へ向っていると思われる。⁽¹⁾大幅な加筆自体が珍しいことであり、⁽²⁾『星と月は天の穴』においても、初版以降の訂正は削除の方向にあることがよくわかる。

初出を書き直すきっかけについて、初版「あとがき」で作者は、
「しかし、欠点が具体的に分っただけでは、書き直すことはできない。ある日突然、その方法を思い付いたのは、幸運であった。以前の作品では、主人公が外へ出て他人と交渉を持つ、その交渉の在り方だけしか書かれていなかった。大きな側面が欠落していたわけで、主人公が一人で部屋に閉じこもっているときの心の中の風景を描かなければ、他人とのかかわり合いに関して意味不明の部分が出てしまう。そのことと、主人公の心象を具象化するために小公園を設定することに気付いたとき、書き直しという厄介な仕事の見通しがついた気持になった。」

と述べているが、その言葉のとおり、初版における大幅な加筆は、すべて矢添の過去の想起と小公園にかかわる部分であり、作品はまさに矢添が一人で部屋に閉じこもって、窓越しに小公園を眺める場面で始まるように改められた。この書き直しが作品の様相をどのように変えているか、それをこれから検討してゆかねばならない。

注(1) 例えば、『コールガール』は昭和36年～37年『週刊サンケイ』に連載ののち、昭和37年角川書店から刊行され、昭和50年には角川文庫に収録された。いずれの場合も著者による訂正が施されているが、更にその後、角川書店版『吉行淳之介エンタテイン

メント全集』(昭和52年)に収録されるに際し、大幅に削除訂正がなされた。文庫版45章が、エンタテインメント全集版では32章に削られ、作品中から姿を消してしまった人物さえある。

- (2)「単行本にする際に、このように大きく手を加えたのは、「原色の街」以来はじめてで、つまり十一年ぶりのことである。」(初版「あとがき」)